

2024年度 入学試験問題  
(仙台・東京・東海・高松会場)

国 語

(60分)

〔注意〕

- ① 問題は㉑～㉓まであります。
- ② 解答用紙はこの問題用紙の間にはさんであります。
- ③ 解答用紙には受験番号、氏名を必ず記入すること。
- ④ 各問題とも解答は解答用紙の所定のところへ記入すること。
- ⑤ 各問題とも特に指定のない限り、句読点、記号なども一字に数えること。

西大和学園高等学校



問題は次のページから始まります。

一 次の記事を読んで、あとの問いに答えよ。

2010年代後半、「ていねいな暮らし」という言葉が流行っていた。

保存食を作りお菓子を焼く。縫物をする。ナチュラル素材のワンピースを着てのんびり過ごす。趣味の要素も交えた家事をていねいに行い、暮らしを整える。

そんな生活が憧れの対象になったきつかけは、『暮らしの手帖』や当時その編集長だった松浦弥太郎のエッセイ集『今日もていねい。』などだ。妊活中だった<sup>(注)</sup>森三中の大島美幸も、「ていねいな暮らしを心がけています」と発言して注目されている。

しかし同時に、インターネット上でバッシングも起こった。それは、SNSでも「ていねいな暮らし」ぶりを投稿する人たちがいたからでもある。

A、「ていねいな暮らし」は憧れの対象となり、同時に批判されたのだろうか？その原因を探ってみたい。

批判の原因は、本来は暮らしに目を向け家事を楽しむと捉え直す提案に過ぎなかったにもかかわらず、「あるべき姿」というプレッシャーに感じた人が多かったことである。強制のように感じる人がいるのは、生き方に正しさを求める社会風潮と無関係ではないだろう。しかし本稿の主題は、女性と家事の関係を掘り下げることなので、それは置いておく。

家事は、人によって得意なこと、不得意なことが異なる。料理が好きな人もいれば、掃除が得意な人もいる。全部が好き  
な人も、家事全般に苦手意識を持つ人もいる。ヤツカイ<sup>a</sup>なのは、家事は、お金と引き換えに依頼される仕事とは異なり、

※ ことだ。

日々の食事を、どこまで手作りし手間をかけるのか。料理は何種類作るのか。献立にどのぐらいバリエーションを持たせるべきなのか。掃除や洗濯は毎日するべきなのか。日々拭き掃除をする必要があるのか。洗濯は、洗濯機を回す前に下洗いをすべきなのか、手洗いのべきモノはあるのか。

多くの家事の担い手は、自分なりの基準を持っている。そのベースにあるのは、自分が育った家庭で、母親が行っていた家事のイメージであることが多い。今も昔も、家事の責任を担ってきたのは、主に女性たちだからだ。

日本では、女性が家庭と仕事を両立しづらい時代が続いてきたため、家庭を持ち子育てしてきた女性の多数派は、専業主婦だった。しかし今、仕事を持ちながら家事の責任を担う女性が増えてきた。

このライフスタイルの変化が、実は「ていねいな暮らし」が流行ると同時に、その理想に複雑な気持ちを抱く女性の増加とつながっ

ている。<sup>①</sup>今のねじれのホッタンは、高度経済成長期である。

日本ではこの頃に専業主婦が既婚女性の多数派となり、「ていねいな暮らし」が理想化される時代が始まった。

この時期、家庭環境は大きく変わった。電気はもちろん、水道、ガスが完備され、台所の人間が板の間となり、家電が導入され、集合住宅に住む人も多くなった。食材の選択も豊富になる。農家出身で都会に住むようになった人が大量に生まれたが、彼女たちは初めて食材を買う生活になった。

育った環境とは異なる新婚生活を始めた、都会の主婦たちは、自身の母親の家事のやり方を手本にすることが難しかった。彼女たちが学んだ教科書は、『主婦の友』などの主婦雑誌や『きょうの料理』などの料理メディアである。その際メディアは、例えば料理なら日替わり献立をていねいに愛情をこめて作るべき、といった心構えまで伝えている。

当時の主婦にとって、主婦業は本業の「仕事」だった。戦中戦後生まれの彼女たちは、男女平等を謳う日本国憲法下で育った第一世代である。両性の合意で結婚し、新しい戸籍を作った彼らは、家父長制のもとで家長が絶対権力者だった戦前世代とは違う。見合いにせよ恋愛にせよ、親の言いなりではなく自分の意志で相手を決めた。ジフを持つ人も多かっただろう。

自ら選んだ結婚で、夫はお金を稼いで家族を養い、妻は家事と育児を受け持つて家庭を支える「対等」な取り決めをした。だから、主婦業は分担した家庭責任であり、彼女たちの本職となったのである。<sup>②</sup>家事に力が入るゆえんである。

**B**、新しい家庭環境は、便利で快適になっていった。水くみや火おこしが必要なくなり、重労働だった洗濯が機械任せとなり、食材を買って冷蔵庫で保存できる生活になる。家事が格段にラクになり、時間に余裕ができたからこそ、「ていねいな家事」はできるようになった。

**C**、それまでの時代にも女性たちは、ていねいに家事をしていた。魚の煮つけは常温で長く保存できるよう何時間も火にかけて。衣類や寝具にもお金を掛けられないので、端切れで継ぎを当てるなどのメンテナンスを行った。着物や寝具は季節ごとに綿を入れたり抜いたりする。豊かで便利な時代になり、そういう手間を掛けなくて済むようになった。

その結果、家事に手をかけることは必要なだけではなく、趣味の領域に入り始めたのである。

<sup>③</sup>家事の趣味化が進んだのは1973年、オイルショックにより高度経済成長期が終わってから。1970年代後半から1980年代前半にかけて、最初の「ていねいな暮らし」ブームが始まったのだ。

アメリカから入ってきたパッチワークキルトや、保存食、お菓子作りがブームになる。また、出版各社が、『赤毛のアン』や『メアリー・ポピンズ』などの物語に登場する料理やお菓子を作ろうと勧めるレシピ本のブームが起る。

味噌や漬物を家庭で作り、縫物や繕い物をするのが当たり前だった時代が遠ざかり始めたこの頃、まるで昔の生活を取り戻すかのように、欧米スタイルの手作り生活がおしゃれなものとして流行ったのだ。

それはあたかも、仕事を持つ主婦が増え始めた時代の中で、専業主婦を続ける女性たちが、自らの存在価値を手をかける家事に求めたかのようなだった。それは、公害が社会問題になり、食の安全性が問われるようになったこと、校内暴力やいじめなど荒れる子どもたちの事件が起こり、子どもが安心して育つ環境が切実に求められ始めた時代とも無関係ではないだろう。

高度経済成長長期もしくはその後の低成長長期に育った世代が、平成になって子育てを始める。そのとき見本にしたのが、昭和の後半に家事に手をかけていた母親たちの姿である。

平成の初め頃、家事や子育てとの両立が困難だと、退職した女性たちが大勢いた。それは、夫たちの家事参加があてにできなかっただけでなく、母親の姿から家事に手間をかけるべきだと刷り込まれていたからである。

2度目のブームの始まりは、2000年代に入って起こったスローフードブームである。不況が深刻になった1990年代の後で、「自己責任」という言葉がオウコウ<sup>d</sup>していた。インターネットと携帯電話が普及し始め、世の中はIT革命に沸いていた。

変化のスピードが加速し、ストレスが増したこの頃、反動のように、理想化された「昔ながら」のゆったりとした暮らしへの憧れが高まった。食事時間が削られていくからこそ、ゆっくり食事をしたいと望む。料理する余裕もなくなり、外食や中食への依存度が高まっていくからこそ、手作りの料理を求めたくなる。スローライフの魅力を伝える『クウネル』などの雑誌も登場した。

2011年、東日本大震災と原発事故により、暮らしの根本を揺るがされた人が大勢生まれる。

自分たちは何のために働いているのか。改めて問い直す風潮が生まれ、田舎暮らしを求めて移住する人や、都会と田舎の両方に拠点を持つデュアルライフを選択する人が増える。放射能汚染に脅かされる関東から、西へ移住した人たちもいる。

そうやって時間をかけて浸透した、暮らしの見直しと再発見が、「ていねいな暮らし」ブームへつながったのである。昭和のブームのときは、専業主婦と働く女性の暮らしには距離があり、手作りにハマる人たちが批判されることも、手作りライフが強制されているように感じている人もあまりいなかっただろう。手作り情報をシヤダン<sup>e</sup>することもたやすかった。

D、今はインターネットが身近にあり、SNSを通じて楽しそうな「ていねいな暮らし」ぶりが目に入りやすくなっている。仕事を持つ女性が多数派となり、たくさんいる働く女性も多様になってきた。

中には、その情報を「あるべき理想」と受け取る人もいる。そんな風に彼女たちが思うのは、自分の母親がそうしていたからかもしれないし、多忙過ぎる日々に対し、うすうす疑問を抱いているからかもしれない。

日々の生活で、家事が行き届いていない今に不満があるからこそ、ほかの人の「ていねいな暮らし」ぶりに腹を立てるのである。それを自分にも求められていると感じて、いらだつのである。

その余裕のなさは、もしかすると、夫を家事の戦力としてあてにできないからかもしれない。一人で抱え込んでいるからかもしれない。生活を守るために忙しく働き、暮らしが荒れがちなことにはいらだっているからかもしれない。

④「ていねいな暮らし」批判は、人が心に余裕をなくす現代社会のありようを映し出しているのである。

阿古真理『なぜ「ていねいな暮らし」はブーム化した一方、批判も噴出するのか』による

(注) 森三中の大島美幸 … トリオで活動するお笑い芸人。

問一 波線部 a～e のカタカナを漢字に直せ。楷書で丁寧に書くこと。

問二 文中の空欄 [A] [D] を補うのに最も適切なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じ記号を繰り返し用いてはならない。

ア しかし イ 一方で ウ なぜ エ たとえば オ もちろん

問三 文中の空欄 ※ に入る内容として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア どこまでやれば正解なのか基準がない  
イ どれだけしても一切の賃金が発生しない  
ウ 休みや休憩なしに働かなければいけない  
エ 自分が好きなようにやるわけにはいかない  
オ 膨大なしごとを一人で行わなければならない

**問四** 本文中には次の段落が抜けている。この段落が入る箇所を本文中から探し、その直後の五字を答えよ。句読点も字数に含めること。

母と娘は2世代にわたって、「ていねいな暮らし」を心掛けた。今のブームに賛否を唱えているのは、そんな主婦の姿が当たり前、と刷り込まれた孫世代が中心である。

**問五** 傍線部①「今のねじれ」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 女性の社会進出の機会が増えても、依然として家事は女性の仕事であるということ。
- イ 家事の際に母親が使ってきた道具と今の時代に使う道具が全く違っていているということ。
- ウ 料理が嫌いであったとしても、生活のためには毎日作らなければいけないということ。
- エ 自分の生活に対する理想を抱きながらも、素直に受け入れることが出来ないということ。
- オ 主婦は社会的な弱い立場にあるにも関わらず、家庭内での責任が重大であるということ。

**問六** 傍線部②「家事に力が入る」とあるが、その理由を五十字以内で説明せよ。

**問七** 傍線部③「家事の趣味化が進んだ」とあるが、その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 科学技術の進歩により家事の自動化や簡略化が進み、時間的にも精神的にも余裕が生まれたから。
- イ 社会情勢の変化と共に女性が働く機会も増え、自分で稼いだお金を自由に使うようになったから。
- ウ インターネットの普及で欧米の文化が紹介されるようになり、みなが憧れを抱くようになったから。
- エ 公害等に代表される社会問題を契機にして、日本という国のあり方に疑問を抱くようになったから。
- オ 家事の質を高めることが働いていない女性にとって、自己を表現する方法の一つとなっていたから。

**問八** 傍線部④「『ていねいな暮らし』」の持つ性質を筆者はどのように考えているか。本文全体を踏まえて八十字以内で説明せよ。



問題は次のページに続きます。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

父親がリストラをきっかけに失踪し、血のつながらない母親が祖父の介護で働くことが出来ない中、リュウが一人で家計を支えなければいけない状況となってしまった。しかし、父親のリストラより前にリュウも仕事を辞めており、今は失業手当と日雇い肉体労働の収入を生活費に当ててゐることで、無職である事実を家族に知られることなく生活できている。本文はリュウが実の母親と会う場面から始まる。

それから数日後の週末。

「よく焼けてるわねえ」

三年ぶりに会ったその人は、明るく笑った。昔から変わらぬ笑顔を見て、俺は反射的に目を伏せた。

土曜の午後四時。繁華街にあるドトールの喫煙コーナーは、サボってる営業マンと暇を持て余した学生と首から携帯電話をぶら下げた業界っぽい人々で一杯だった。俺の目の前では、最も頼つてはいけない人が、アイスカフェラテの上にシロップを注いでいた。

「理由はなんであれ嬉しいわ。リュウの方から誘ってくれるなんて初めてだもん」

シロップをかき混ぜながら、その人は笑った。

平日の全てを肉体労働に費やしたとしても月に二十数万しか創り出せない俺は、その全てを家族に差し出すことは <sup>a</sup> やぶさかではなかったが、今後無期限でそれをやり続けなければならぬと考えた時、ふとこの笑顔を思い出してしまった。そしてある夜、俺は猫を膝に置いて電話をし、親父の失踪を伝え、詳しく話したいから会ってくれと頼んだのだ。

その人が親父と別れたのは、俺が十歳の時だった。中学を出るまでは半年に一度くらいの頻度で親父を含む三人で会っていたが、高校に入った頃から徐々にパンが長くなり、実家を出てからは <sup>ほとんど</sup> 殆ど会っていなかった。

「うふふ……」

「何?？」

「ううん。大きくなったねって言おうと思ったんだけど、二十七にもなった男にそれも変だなと思って。大きくなったんじゃない、遅 <sup>たくま</sup> しくなったんだ、リュウ」

最後に会ったのは、婆さんが死んで線香を上げに来た三年前だった。その頃と比べれば、肉体労働をしている今の俺を見て陽に焼け

てるとか遅くなったなんていう感想を持つのは当然だった。

「遅くなったっていうか、大人っぽくなったのかな？」

その人は四十六のおばさんぽい手付きでストローを持ち、悪戯いたずら好きな少女みたいな目付きで笑った。

歳を取らない人だった。十九で親父と結婚して俺を産み……あ、逆だ……俺を産んで結婚し、二十九で別れてずっと独り身。親父と離婚した後で准看護師の資格を取って病院で数年働き、今は訪問介護の会社で働いている。世間知らずな俺でも、それがどれ程の時間と労力を費やさなければ手にするこの出来ないポジションか、想像くらいつく。

そんな目まぐるしい十七年を送ったせいも、ちつとも歳を取っていない。若造りしてるという意味じゃない。顔や手のディテールはどこから見ても四十代半ばのおばさんなのだが、態度や表情が十七年前とちつとも変わらないのだ。

「みんな元気？」

「うん、まあなんとか」

「お爺さんは？」

「身体は大丈夫。少しポケちゃってるけど」

「そう……連れ合いを亡くすとガクンとくるっていうものね」

その人は、いなくなった前夫のことを訊ねる前に残された元家族の方を気にした。次に、三年前に少し顔を合わせただけのカナやケイの近況まで「どうなの？」と訊ねた。俺ときたら、会ってくれと頼んだクセに俯うつむきつ放しで、冷水の入ったグラスの表面にびっしりついた水滴を見つめながら、ポツリポツリと答えるばかりだった。しかもそれはすべて、今の家族に対する愚痴だった。

ケイは親父が出て行ってから突然、高校へ行かないと言い出して新聞配達を始めたが二ヶ月程で辞め、一度は退部した陸上部に戻っている。

「体育祭のクロスカントリーで何位だかになって、駅伝の選手に選ばれたって。ッしょうがねえなあ」と言いながら、ヤケに張り切ってる」

カナは家族と顔を合わせるのを避けるように夜な夜な歩いていたが、最近になってちゃんと帰宅するようになった。

「貰もらったのか拾ったのか知らないけど、不細工な猫を連れて帰って。相変わらず無愛想だけど、食事の時にはちゃんと顔を見せるようになった」

「へー」

俺の話聞きながら、その人は「ふーん」と「へー」を繰り返し、<sup>②</sup> なんだか妙に嬉しそうだった。

「まったく、二人とも何を考えてるのか分かりやしない」

そうこぼすと、その人は「当たり前じゃない」とまた笑った。

「何を考えてるかなんて、分かる筈がないでしょ。何をやっているかだけ見えてればいいと思うよ。それだけ見えてたら、リュウは一家の長として合格だよ」

一家の長と言われて、思わず顔を上げた。否定しようとしたが、言葉が出なかった。けれどその人は、俺が何を言おうとしているのか分かっているみたいに笑って頷いた。

「お父さんが出て行かなきゃ、そんなこと気にもかけなかったでしょう？」

確かにその通りだった。ケイが陸上部で何を専門にしているのかとか、カナがどれくらい学校の成績がいいのかとか、そんなことは親父が出て行ってから知ったことだ。でも、だからって…。

「でも、だからって出て行ったあの人を許す必要もないんだけどね」

俺の心は、まるつきり見透かされているようだった。

「まったく、昔っから何一つ成長しない」

それからその人は、一頻り親父に対する昔の愚痴をこぼした。

基本的には人のいいおバカさん。お調子者でふざけてばかりいて、良く言えば社交的、悪く言えば好き勝手に生きてる風来坊。新しい家族を持つてからは割と真面目な勤め人になったと思っていたけど、久々に放浪癖でも発症したのではないか…。

## 【 中略 】

「ホント、変な人だよ…あ、それに猫の名前！」

俺が物心付いた頃から、ウチでは絶えず猫を飼っている。小学校に入る前まで生きてたのが、ヒロジジで、次が、横山さんという名前だった。

「そう言えば、横山さんはなんで、さん、付けだったんだろ。ヒロジジってのも、あんまり猫っぽくないよな」

「それはねえ、あの人が苦手な人の名前なのよ」

ヒロジは最後のバンドのリーダーの名前で、横山さんは就職先の上司の名前だった。

「あの人、猫が好きでしょ？名前を呼んで可愛がってるうちに、苦手な人のことも『おんなじ』名前だっと思って慣れてるんじゃないかって。逆じゃない、ねえ？」

これは俺も知らないことだった。実にどうでもいいことではあるが、長年の胸のつかえが下りた。ふと、カナとケイにも教えてやりたいなんて思った。あの二人に何かを話したいと思うことは初めてで、笑いながら説明している自分の姿を想像すると、なんだか妙な気分だった。

「あれ？そう言えばさつき、今も猫がいるって言ってたよね。なんて名前？」

「ああ、横山さんの後で飼ってたのはやっぱり親父が『部長』って名付けてたんだけど、そいつは親父と一緒にいなくなっちゃって。それで今の猫はカナが『部長代理』って名付けて……」

「アハハハ！カナちゃんってさ、きつとあの人の血を受け継いでるよ、そのセンス！」

二人で笑い、それがおさまるとまた親父にまつわる別の話題で笑い合った。気付いたら、もう二時間近く喋しゃべっていた。

「ゴメン、長話しちゃったな」

「ううん。こっちこそゴメンね、食事でも出来ればいいんだけど、夜も仕事あるから」

③ それまでと少し違う感じで、柔らかに笑った。四十六歳の母親が、子供を見るような目だった。『ような』じゃないか。

「じゃあ、これ……」

「あ……」

その人は初めて周りを気にしながら小声でそう言い、やや厚みのある封筒をそつとテーブルに置いた。中を覗くと、現金だった。帯が付いているから、数えなくても額は分かった。

「百万円。こんな額じゃ数ヶ月分だろうけど」

すっかり忘れていた。俺は親父の昔話や歴代の猫の話をする為にこの人を呼んだワケじゃない。金を ※ しようと思っていたのだ。自分から連絡したことのない息子が電話で父親の失踪を知らせ、わざわざ会ってくれと頼む。それだけで、この人には用件が分かっていた。呼び出しておきながら本題に入らず、黙って姿を消した親父が自分と同じ歳だった頃の収入を気にし、しかもあっさり④ と敗北。かつて自分を置いていった母親を憎みながらも頼り、しかも自分からは頭を下げず気遣いに甘える。参った。忘れてたなんて、言い訳にならないんだろうな。これじゃまるで、いつまでも親に甘えてるガキだ。

「俺……」

「いいのいいの、何も言わなくて。返すのも、いつだっていいからね。私、そんなに困ってないから」

多分、それは嘘だ。この人がどんな暮らしをしているのか、俺はまったく知らない。けれど、用意された額が俺の想像を遥かに超えていたからといって、暮らし振りまで俺の想像と懸け離れているワケじゃないだろう。

また「何やってんだろ、俺」と『逃げ出しやいいじゃねえか』がグルグル頭の中を駆け巡った。

「嘘ついたり利用したり、そうまでして継続させる人間関係なんて意味ねえよ」  
心底、そう思った。

何も言えずに俯く俺を見て、立ち上がりかけていたその人は座り直した。そして「あのね、リュウ」と子供を諭すように言った。

「私、訪問介護の仕事をやってるじゃない？」

なんの話か分からないが、どうやら諭す<sup>ツ</sup>ように<sup>グ</sup>ではなさそうだった。

「実は今、あなたの家の近くにも週に三日は行ってね、ホラ、山の上に古い公団があるでしょ。あそこ」

俺は俯いたまま黙って聞いていた。

「守秘義務って程でもないけど、一応は個人名はふせるね」

そう前置きして始まった話は、こんなものだった。

ある母子家庭があつて、母親は夜の仕事をしていた。母親がある男といい仲になり、再婚する運びになったのだが、籍を入れる直前、男が脳血栓のうけせんで倒れた。一命は取り留めたが、右半身に重い麻痺が残り仕事も辞めざるを得なくなった。それでもその母親は迷わず入籍し、今は三人で公団に暮らしている。食事も下の世話も入浴も自力では出来ない身体だが、母親は夜の仕事柄ずっと介護は出来ない。そこで彼女が仕事に出ている夜間と、明け方に帰宅して眠っている昼過ぎまで、つまり一日の殆どは中学生の娘が面倒を見ていた。

「一口に家族って言っても、色々なパターンがあるのねえ、ホント」

俺はいつの間にか顔を上げて聞いていた。なんの話なのかまだ分からなかったが、その内容自体が気になった。

当然、娘は学校に行けなくなってしまうが、以前からその男について母親の再婚を喜んでいたので、嫌な顔一つせず頑張った。

だが、あまりに不登校が長引く為に学校側が家庭訪問し、事態が分かった。担任教師の助言で母親が役所に相談に行くと、窓口で「早く相談してくれば良かったのに」と言われた。男は要介護者と認定され、市から介護補助金が出ることになった。生活は苦しいまま

だが、それでも週に何日かは訪問介護を頼めるようになり、長年連絡をとっていなかった男の親族にも助けを求め、娘は学校に通うことが出来るようになった。

「まあ私も仕事として出入りしてるだけなんだけど、母親は派手な形なまして愛想もないし、娘も異常に陰気な子でね、これは何かあるなあとも最初は思ったのね。でも生命保険には入ってなくて、保険金目当てじゃない。なんだろうって色々勘かんぐったけど、何も分からなかった。結局ただ単純に、母親も娘もその人が好きだから世話をしてて、だけど世間知らずだから必要以上に頑張がんっちゃっただけなのね。何かある、なんて最初から疑ってた自分が嫌になっちゃった」

そう話を締めくくり、グラスの底に残った氷をガリガリ噛み砕いた。俺は結論を待ったが、一気に喋り切ったのに満足したのか、その人は俺の視線に気付いても「何？」と言っただけだった。

「自分が嫌になっちゃった話……じゃないよね」

「うん、そうなの」

「ああ、そうそう。つまりね、辛くて苦しい状況っていうのは、自己申告制ってこと」

「そう……」

「うん、そうなの」

店を出ると、既に日が暮れていた。結局、長い映画くらいの時間、喋なっていたことになる。

「リュウ、あんまり頑張り過ぎないようにね」

ジャケットを羽織ると、その人は俺の肩に手を置いて言った。並んで立つと、ひどく小さく感じた。

俺が「ああ」と応えると、しばらく何か考えて、言い直した。

「訂正。やっぱりあんた、頑張がんんなさい」

「なんだよ、どっちだよ」

「頑張り過ぎるくらい頑張がんんなさい」

背中をひとつ、叩かれた。

十歳の時、家を出て行くその人を、俺は靴も履かずに追い掛けた。追い付いて手を握ると、その人は振りほどき、振り向きざまに俺の頬を打ってこう言った。

「足手纏またいなよー！」

その時と同じ手で、俺は今日、背中を押された。

⑥ 「あのさ、ありがとう……母さん」

その人は「うわー、母さん、だって」とおどけて言い、悪戯っぽい方の目付きで笑った。

三羽省吾『厭世フレーバー』による

問一 波線部 a 「やぶさかではなかった」、b 「勘ぐった」の意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で

答えよ。

a 「やぶさかではなかった」

ア 気持ちの良いことではなかった

イ 仕方のないことだと思った

ウ 不可能なことではなかった

エ 喜んできたことであつた

オ しなければいけない義務であつた

b 「勘ぐった」

ア 水面下で協力を仰いだ

イ 解決に向けて協力した

ウ よくないことを想像した

エ 地道に調査を重ねた

オ 正直に相手に尋ねた

問二 文中の空欄 ※ に入る「素直で悪気がない」「思慮に欠ける」という意味も持つ、二字熟語を答えよ。

問三 傍線部①「俺ときたら、会ってくれと頼んだクセに俯きつ放し」とあるが、このときの「リュウ」の心情を説明したものと

最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えよ。

ア 大人になっても母親に対する憧れが強く残っていることを自覚し、恥ずかしく思っている。

イ 長い間、連絡もしない状態になっていたので、どこかよそよそしく感じ気まずく思っている。

ウ 幼い頃に家を出た実の母に会う理由が一方的な頼み事であることに、後ろめたさを感じている。

エ 若々しい母親の笑顔を見たことをきっかけに幼いころの記憶が思い出され、感傷的になっている。

オ どうしても会わなければいけない事情はあったものの、やはり母親に会うことを辛く思っている。



**問四** 傍線部②「なんだか妙に嬉しそうだった」とあるが、その理由として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 家を出てから息子の行く末を案じていたが、久々に再開してみると息子は逞しい立派な大人になっていたから。
- イ 家を出て長い時間がたってしまったが、目の前にいる男性から幼い頃の息子の面影を見ることが出来たから。
- ウ 大人になり感情を上手く隠そうとしているが、親である自分にはその気持ちが手に取るように理解できたから。
- エ 久しぶりに再会した息子は、責任のある立場で家族のことを気にかけることが出来る男性に成長していたから。
- オ 八方塞がりの厳しい状況の中で、最後に頼ろうと思った相手が生みの親である自分であったのだと確信したから。

**問五** 傍線部③「それまでと少し違う感じで、柔らかく笑った」とあるが、このときの「母親」の心情として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 久しぶりの再開で緊張していたが、話をする中で打ち解け今後も良い関係を築いていけそうだと思いき喜んでいる。
- イ 呼びだした要件を伝えることは出来なかったが、家族のために会いづらいであろう自分に声をかけた息子のことを思いやっている。
- ウ 連絡のなかった息子から呼び出されどんな要件かと思っていたら、つまらない話をするだけであったことに寂しさを感じている。
- エ 立派な大人に成長したかと思っていたが、自分から言い出す勇気を持ち合わせていなかったことに落胆し哀れに思っている。
- オ どのような頼みにも協力を惜しまないつもりでいたが、息子が何も言ってくれそうもないので聞き出すことをあきらめている。

**問六** 傍線部④「かつて自分を置いていった母親を憎みながら」とあるが、この気持ちが反映された母親に関する表現を本文中から十字程度で抜き出して答えよ。

**問七** 傍線部⑤「立ち上がりかけていたその人は座り直した」とあるが、この行動の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 責任感を持ち事態に向かうことは大切だが、周り人の助けを借りることも大切だと教えたかったから。

- イ 息子がお金を援助したことを申し訳なく思っていることを察し、当然のことだと伝えようと思ったから。
- ウ 離れて暮らしており普段はゆっくり話も出来ないのです、この機会に悩みを聞いてあげようと思ったから。
- エ 悩み続け自分では答えを出すことの出来ない息子を一家の長として不適切だと注意しようと思ったから。
- オ 別れに際して、息子から自分に対しての不信感を感じたので、その誤解を解いておこうと思ったから。

**問八**

傍線部⑥「あのさ、ありがとう……母さん」とあるが、このときの「リュウ」の心情を六十字以内で説明せよ。

問題は次のページに続きます。

三

次の文章は、毛虫をかわいがる風変わりな姫君を主人公とした話である。以下の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

ある上達部(注1)の御子、うちはやりてものおちせず、愛敬づきたるあり。この姫君のことを聞きて、「さりとも、これにはおちなむ」とて、帯の端の、いと①をかしげなるに、蛇のかたをいみじく似せて、動くべきさまなどしつけて、うろこだちたるかけ袋に入れて、結びつけたる文を見れば、

はふAはふも君があたりにしたがはむ 長Bき心の限りなき身は

とあるを、何心なく御前に持て参りて、「袋など。あくるだにあやしくおもたきかな」とて、ひきあげたれば、蛇、首をもたげたり。人々、心②を惑はしてののしるに、姫君はいとのどかにて、「なもあみだぶつ、なもあみだぶつ」とて、「な騒③ぎそ」と、うちわななき、顔、ほかやうに、「あやし(注2)き心なりや」と、うちつぶやきて、近く引き寄せたまふも、さすがに、恐ろしくおほえたまひければ、立ちどころ居どころ、蝶のごとく、こゑせみ声に、のたまふ声の、いみじう④をかしければ、人々逃げ去りきて、笑ひいる。その後しかじかと 聞aこゆ。「いとあさましく、むくつけきことをも聞くわざかな。さるもののあるを見る、みな立ちぬらむことこそ、あやし⑤きや」とて、大殿(姫君の父)、太刀をひきさげて、もて走りたり。よく見たまへば、いみじうよく似せて 作bりたまへりければ、手に取り持ちて、「いみじう、物よくしける人かな」とて、「かしcこがり、ほめたまふと聞きて、したるなめり。返事をして、はやくやりたまひてよ」とて、渡りたまひぬ。

『堤中納言物語』による

(注1) 上達部の御子 …… 上流貴族の子息。

(注2) あやしき心なりや …… 美しい間だけちやほやし、醜くなると恐れるとは不都合な連中だと、姫君が侍女たちをたしなめている。

問一 傍線部①「をかしげなる」・④「をかしけれ」の意味として最も適切なものを次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

① 「をかしげなる」

ア 粗末な      イ 奇妙な      ウ 小さな      エ 立派な      オ 大きな

④ 「をかしけれ」

ア 恐ろしい      イ 気の毒な      ウ 滑稽な      エ 趣深い      オ 美しい

問二 傍線部A「はふはふ」・B「長き」は何をイメージ付ける表現か。本文中の漢字一字で答えよ。

問三 和歌「はふはふも君があたりにしたがはむ長き心の限りなき身は」は表向き求愛の内容になっているが、その男が和歌を詠んだ本当の狙いは何なのか。二十字以内で説明せよ。

問四 傍線部②「心を惑はしてののしる」・③「な騒ぎそ」の現代語訳として最も適切なものを次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

②「心を惑はしてののしる」

- ア びっくりして男を罵倒する
- イ 意図がわからずに動揺する
- ウ 正気を失って倒れ込む
- エ 仕事をほったらかして逃げ回る
- オ 気が動転して大騒ぎする

③「な騒ぎそ」

- ア 大変だ
- イ 騒ぐな
- ウ 動くな
- エ 物騒だ
- オ 恐ろしい

問五 帯を見た姫君の反応を四十字以内で説明せよ。

問六 破線部a「聞こゆ」・b「作る」・c「かしこがり」の主語として最も適切なものを次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- ア 姫君
- イ 姫君の父
- ウ 貴族の子息
- エ 侍女たち

問七 傍線部⑤「あやしきや」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 本物か偽物かの区別もできずに大騒ぎしている侍女たちの行動を愚かだと思っているということ。
- イ 冷静な姫君と違ってただただ狼狽するだけの侍女たちの反応に心底腹を立てているということ。
- ウ 侍女たちが逃げ出すほどののに動じることのない姫君の気質を不思議に思っているということ。
- エ 姫君を放置したまま逃げ出してきた侍女たちの行動を許しがたいことだと思っているということ。
- オ 姫君や侍女たちを翻弄した貴族の子息のいたずら好きに困ったことだと思っているということ。

国語解答用紙

受験番号	氏名

※の欄には何も書かないこと。

一										
問八				問六			問三	問二	問一	
								A	a	
								問四		
								問五	C	c
									D	d
								問七	e	※
70	50	30	10	50	30					
※										

二					
問八			問七	問五	問一
					a
					問六
					問二
					問三
					問四
60	40	20	10		10
※					※

三					
問六	問五		問四	問三	問一
a			②		①
					問二
b			③	④	
					問七
c					
					問四
30	10		10		40
※					※

※
---

# 国語訂正

二

問四 選択肢ア

誤 ……久々に再開してみると…



正 ……久々に再会してみると…

問五 選択肢ア

誤 久しぶりの再開で…



正 久しぶりの再会で…

三

問六 問題文

誤 破線部 a 「聞こゆ」・ b 「作る」…



正 破線部 a 「聞こゆ」・ b 「作り」…